

子どもの製作活動と発話に関する研究

— 発話の記録と共有 —

高 梨 明 恵・小 林 俊 介

山形大学 教職・教育実践研究 第12号別刷

平成 29 年 3 月

子どもの製作活動と発話に関する研究

—発話の記録と共有—

高梨明恵¹⁾ 小林俊介²⁾

製作活動に限らず保育の現場では子どもの発話の記録が行われているが、共同製作において子どもたちの発話を記録し、子どもたち自身が共有することによる教育的効果については体系的な研究は見当たらない。本研究では作品の共同製作の過程において、子どもたちの発話をホワイトボードに記録すると、子どもたちがそれを共有することが造形活動に対する思考や「お話」を膨らませ、さらなる発話を促すとともに、造形活動の展開を促進させることが示された。また、本実践においては、子どもの興味に即して製作過程における主題を臨機に変更したことが、子どもの意欲を引き出し、製作活動の展開を促すうえでも有効であった。この問題に関してレッジョ・エミリア・アプローチにおける「エマージェント・カリキュラム」を参考に考察した。

キーワード：子ども, 製作活動, 発話, 記録, 共有

1. はじめに

製作活動に限らず保育の現場では子どもの発話の記録が行われているが、主にそれは記録を保育の反省として事後的に省察するためであって、共同製作に限らず、保育活動の場面において子どもたちの発話を子どもたち自身が共有することによる教育的効果については、体系的な研究は見当たらない。

もっとも、小学校段階以上においては、板書などで子どもの発言を記録しながら、授業の主題を子どもが共有し、授業の流れ＝子どもの思考を整理することは普通に行われているし、その有効性も様々な形で研究されている。

子どもが学習対象に対するイメージを共有するために学習対象に関連する単語を書き出す活動については、例えば栢野彰秀ら(2016)は、理科の授業において自分が書いたイメージマップと班の友達または教師が書いたイメージマップとを比較するだけでなく、話し合いでそれらを共有することが形成的評価に有効であるとしている。子どもが自分のイメージマップ上に書きだした連想語をもとに、班の友達や教師が書いたイメージマップとの比較と話し合いによって新たに学習内容に関連する項目をつけ足したり、再確認したりし

ながら単元学習をふりかえる活動によって、指導と評価が一体化された授業が構築されるという。

一方、幼児保育においては、幼児の言語能力や読み書きの能力を考えれば当然ではあるが、子どもの協同的活動におけるイメージの共有は主に保育者の発話＝質問や賞賛、誘いかけなどの発話によってなされているようである。レッジョ・エミリア・アプローチによるプロジェクト型保育においても、子どもを「プロジェクト」に誘導するのは最終的には保育者の言葉がけであり、子どもたちとの対話を通じてである。それでも、例えば「葉っぱのプロジェクト」においては、葉の観察や描画による活動によって子どもたちの葉に関する一般の見解が共有され、後の保育者との対話を促進する効果を生み出している(J. ヘンドリック, 2000, p. 64)。これは幼児の絵画が視覚的写実であるよりもむしろ絵による指示的機能を持ったある種の「ことば」であることをあらためて示すとともに、視覚言語によるイメージの共有活動がなされているものといえる。

本研究は、昨年度の子どもの製作活動と発話に関する山形大学附属幼稚園における研究(布施あかねら, 2016年)の続きである。昨年度は子どもの個々の貼り絵による作品と発話との関係が主題であったが、今年度は個人の製作に加え、共同製作と発話の関係が主題である。共同製作を主題に据えたのは他の子どもとの交流や協調が発達段階的に課題となる4歳児を考

1) 山形大学附属幼稚園

2) 山形大学地域教育文化学部

2 高梨・小林：子どもの製作活動と発話に関する研究

慮してのことだが、共同製作においてはイメージをいかに共有するかが充実した製作活動の展開の要点となるからでもある。本研究では子どもたちの発話そのものを文字や絵でホワイトボードに記録し、可視化して共有する。この作業の有効性の検証はその後の製作活動の展開や個々の子どもの製作部分に対する思いの聞き取りを通じて検証されるものとする。また、昨年度の研究が示したように、そのような保育者の子どもに対する聞き取り自体がさらなる発話を促すことが示されるものと予想される。

2. 実践の経緯

山形大学附属幼稚園では平成27年度より幼児の言葉の育ち（幼児期に育てたい言葉）を研究テーマに取り上げている。この実践で取り組んだ4歳児の子ども達は、3歳児から継続して、製作活動や造形活動後の発話に取り組み、実践している。そこで、今年度は、子どもの発話を引き出し、発話を記録しながらの共同製作を実践した。

①全体に対する問い掛け

活動は5月11日、11時半から12時頃まで行われた。今年から縄跳びの教材が新しく加わったので、興味をもって欲しいという担任の思いから、ぼっかぼかタイム（学年での一斉の活動）で、子ども達みんなの縄跳びをつなげて道をつくった（図1）。みんなでつながって歩いていると、「先生、りんご組のお部屋までつなげたらどう？」という提案が子どもからあり、縄跳びをりんご組保育室まで延ばしていった（図2）。子ども達は、道が延び、保育室まで続いたため大喜びする。縄跳びの上を歩きながら、「先生、この道、壁にもつなげたいね」というつぶやきが出てきた。保育者はその願いを実現したいと思い、「今度は、壁につなげていこうね」と投げ掛けたところで活動を終えた。

5月12日、昨日の子どもからのつぶやきを活かし、ぼっかぼか活動で廊下の壁に道をつくる活動を行う。子ども達にも扱いやすく、簡単に様々な形に変化することから、新聞紙で道をつくることを保育者から提案した（図3）。新聞紙を長い棒状にしたものをつくり、壁のどの場所にどのような形で掲示したらよいか、一人ひとりから聞き取り、保育者が掲示して道が繋がった（図4・5）。新聞紙の道は、昇降口まで繋がった。子どもから「先生、この道歩きたいね」というアイデアが出てきたので、保育者は「それはいいねえ。何か歩ける方法考えようか」と言うと、子どもから「自分



図1：遊戯室で縄跳びをつなげた道を歩く。



図2：遊戯室から保育室まで道がつながる。



図3：新聞紙を丸めて棒状にする。



図4：廊下の掲示板上に棒状の新聞紙をつなげて貼り、道をつくる。



図6：子どもの発話を絵と文字で表し、ホワイトボードに書き留めておく。



図5：廊下の掲示板上に道が繋がった。

の人形つくったらいいんじゃない？」と提案があり、保育者は「それでは、次は自分の人形をつくって道を歩いてみようね」と話して活動を終えた。

②発話の記録による共有と再現

(迷路からスカイツリーへ)

5月18日、ぼっかぼかタイムで、自分の人形をつくる。画用紙にクレヨンで自分を描き、割り箸をつけた人形(ペープサート)が出来上がった。出来た人形を持ち、早速廊下の道で遊ぶ子ども達。遊びながら、「迷路みたい、迷路にしよう」と言いながら遊んでいる。しばらくすると、「この迷路つままない」という声があがる。保育者は、このつぶやきから、この迷路遊びが広がることを期待し、「今、この迷路つままない。というお友達がいたけど、もっと楽しい迷路にするためには、どうしたらいいかなあ？」と問い掛ける。すると、子ども達から「お店屋さんつくったら」「車屋さんもあるといいねえ」



図7：スカイツリーをつくるための材料を探す。



図8：一人ひとりが箱等を組み合わせてスカイツリーをつくっていく。

4 高梨・小林：子どもの製作活動と発話に関する研究

「ドーナツ屋さんがあったらいいなあ」「花屋さんもいいんじゃない」など次々にアイデアが出てくる。保育者はホワイトボードに子ども達から出てきたアイ



図9：自分とつくったスカイツリーを比べている。



図10：友達と一緒につくと、より高いスカイツリーになることに気づき、一緒に作り始める。

ディアを絵と文字で表現し、書き留めておいた(図6)。このホワイトボードは本実践の期間中子どもが随時見ることができるよう消さないでおいたので、保育時間中や登園・降園時にも子どもが眺めながら、「どこ行きたい？」など話す子どもの姿が見られた。

様々な意見が出るうちに、「スカイツリーがあったら楽しいんじゃない」という意見が出てきた。保育者はスカイツリーを知らない子もいるのではないかと思い、共通理解が必要だと考え「スカイツリーって知ってる？」と聞くと、「知ってる！すごく高いんだよ」という。保育者が「どのくらい？」と聞くと、子どもが「幼稚園よりずっと高いよ」と答え、みんな「えー」と驚く。「そんな高いのみんなつくれる？」と聞くと、「つくりたい。みんなでつくれば大丈夫だよ」と子ども達は張り切っている。保育者は、迷路に町のようなものをつくっていくイメージでいたため、スカイツリーに子どもの興味が移ってしまい、どうしようか迷ったが、子どもの興味に添った活動にしようかと決断した。「それでは、今度スカイツリーをみんなで作ろうね」と言い、その日の活動を終えた。

5月19日、「ぼっかぼかタイム」でスカイツリーづくりを行った。家庭から集まってきた廃材を全て出し、種類ごとにまとめて保育室に配置した。みんなで作ろうという話し合いだったが、製作に入ると、一人ひとりが廃材を選び作り出した(図7・8)。箱を上積み重ねていく子、横につなげていく子、色々な形の箱を組み立てていく子など様々だった。つくりながら、「ぼくより、高くなったよ」と自分と比べている子、友達同士でつくったものを比べている子などいた(図9)。製作が進むにつれて、「〇〇君、一緒につなげよう」という子が出てくると、あちこちで作品がつながりだした(図10)。そのうちに、「みんなのスカイツリーをつなげると、本物みたいに高くなるんじゃない」という子どもの提案にみんなが賛同し、みんなのスカイツリーが出来た。スカイツリーが出来上がると、自分の人形を持って、スカイツリーで遊んでいた(図11)。一番高い所まで登りたいという気持ちが強いいため、自然に椅子を持った子ども達が集まり、下からなるべく上まで、登らせようと遊んでいた。

③個人の製作(スカイツリーから迷路の家へ)

5月20日、登園するとすぐにスカイツリーの所に行き行って遊ぶ子、ホワイトボードを見ながら話している子などがいた。子ども達から、「先生、やっぱりス



図 11：出来上がったスカイツリーに自分の人形を登らせて遊んでいる。

スカイツリーにいくまでに、迷路にお家とかお店があった方がいいよ」と提案があった。みんなに投げ掛けたところ、「すぐにつくりたい」という声があがり、個人の製作に入った。それぞれがつくりたいものを主に廃材を使いながら製作が進んでいく。次第に折り紙やスズランテープ、画用紙、クレヨン等、素材が広がり、工夫しながらつくる姿が見られた(図 12)。出来上がると、迷路のどの場所にどのように掲示して欲しいかそれぞれの思いを聞き、再現していった(図 13)。

友達が掲示している時に、「これは宇宙惑星だよ」(論文末の表 1 ; No5)と言っているのを聞いていた子どもが、その言葉に刺激を受け、「これは、宇宙マンションだから、〇〇君のとなりがいい」(表 1 ; No12)といいだした。その子は最初から「宇宙マンション」をつくるという目的があったのではなく、スカイツリーと同じように、つなげていくこと自体を楽しんでいた。しかし、友達の言葉に刺激を受け、自分の作品にイメージが広がり、「宇宙マンション」といって掲示していた。

表 1 ; No13 の「ピタゴラスイッチ」を製作した子どもは、掲示してから毎日のように角度を変え、ビー玉を転がしながら遊び、どの角度が一番速く、どの角度が遅いかなどを試しながら確認していた。

表 1 ; No21 の子どもが製作した「クリニック」は、親がクリニックを営んでいるため、それを再現して



図 12：個人で迷路にあると楽しいものをつくる。



図 13：それぞれがつくったものを配置したい場所に掲示していく。

いる。しかし、「かわいくなって帰れるよ」という言葉からは、将来の夢がプリキュアのため、自分の夢もクリニックに合わせて再現している。

表 1 ; No32 の子どもが製作した「唐辛子屋さん」は、毎日のように折り紙で唐辛子をつくり増やしていった。

表 1 ; No14 の望遠鏡がある船は、船の周りが海になるように、どんどん掲示を付けたしていった。

子ども達は、製作したものに対して、自分の人形で遊ぶ子もいれば、少しずつ、増やしていく子、周りを飾っていく子などもいた。それぞれの子どもの思いが製作の仕方にも表れていた。

3. 考察

本実践の課題である集団製作におけるイメージの共有と発話の関係に関しては、(1) 保育者の問いかけ、(2) ホワイトボードによるイメージの共有が発話と製作の展開を促すうえで有効であった。すなわち(1)に関しては迷路＝道路の沿道に様々なお店屋さんを設け

6 高梨・小林：子どもの製作活動と発話に関する研究

るというイメージの展開に際して「もっと楽しい迷路にするためには、どうしたらいいかなあ?」という保育者の問いかけが子どもたちの様々なお店やさんの提案＝発話へとつながった。また、(2)に関しては子どもたちの様々なお店やさんの提案をホワイトボードに絵と文字で記録し、共有したことが、子どもたちの集団的な製作活動に対する意欲を持続させることにつながった。また、スカイツリーを知らない子どもにもイメージを共有させ、多くの発話を促すことにつながり、ひいては、当初個々の製作であったものが、友達とつなげるとより高いスカイツリーになることへの気づきにつながり、活発な交流と発話が生まれ、複雑で大規模な製作が展開されることとなった。

次に個々人の製作に注目すると、本実践においては個人の製作と集団の製作が往還的に、ゆるやかに結びついて展開されており、そのなかで子どもたち相互の刺激が製作と発話を促している。昨年度における3歳児の個々の製作を対象とした我々の研究との大きな違いであろう。例えば、先述のように表1; No. 12の「宇宙マンション」を製作した子どもは、製作中は廃材をつなげることをのみを楽しみ、何をつくっているか意識していなかったが、No. 5の子どもの「宇宙惑星」ということばに触発され、その隣に掲示し、自作を「宇宙マンション」と名付けている。これは我々の昨年度の研究における分類にならえば「製作中に明確な命名と物語の展開が行われず、保育者の発話の促しによって創作され、後付けが色濃いコメントを有する」タイプⅡの子どもにあたるが(布施あかねら, 2016年, p. 23), ただし本実践において命名のきっかけは保育者ではなく友だちの発話によっている。個々の製作活動を中心としながらも、子ども同士の発話や相互作用のなかでイメージの共有が行われるという4歳児の発達段階に即した活動がみられたといえる。

ところで、本実践はレッジョ・エミリア・アプローチにおける「エマージェント・カリキュラム」の優れた実践例になっていることに気づく(J・ヘンドリック, 2000, pp. 58-69)。本実践の趣旨からいって当然のことではあったが、子どもの発話や子どもの対話を大切にし、子どもの「やる気」を引き出すことに重点をおいたことから導かれた帰結であろう。レッジョ・エミリア・アプローチの用語にならえば、本実践は当初縄跳びから導かれた「道」のプロジェクトとして開始され、ペープサートの人形の歩く「道」から「迷路」作りへ、さらには沿道の町作りへと発展しかけたものが、子どもたちの要望により急遽「スカイツリー」作りへと変

更された。ここで保育者が「迷路に町を作る」という当初のイメージにこだわらず、子どもたちの願いを優先させ、「緊急カリキュラム」を発動させたことが、結果的に子どもたちの「やる気」を持続させ大規模な造形を実現させた。また最終的には保育者の意図どおり迷路の町づくりへと発展的に結実した。そのなかで子どもたちの交流と発話が促進され、個々の製作がつながることで大規模な製作活動へと展開したことは大きな成果であった。

文献

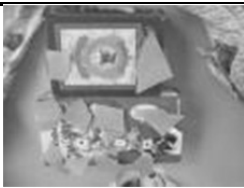








- ・栢野彰秀・山代佳菜美・森健一郎, 「指導」と「評価」を一体化させた小学校理科授業の実際: 第3学年「電気の通り道」単元を例として, 島根大学教育臨床総合研究, 15号, 2016年。
- ・J・ヘンドリック編著, 石垣恵美子・玉置哲淳監訳, レッジョ・エミリア保育実践入門—保育者はいま, 何を求められているか—, 北大路書房, 2000年。
- ・布施あかね・高梨明恵・木村重子・佐藤郁子・小林俊介, 子どもの製作活動と発話に関する研究: 貼り絵における「命名」的性格と物語性, 山形大学教職・教育実践研究, 11号, 2016年。

表 1 :【山形大学附属幼稚園年中組 迷路造形製作 一覧】

	作者コメント		作者コメント
 No. 1	(これなあに) スカイツリー。 高くて宇宙につながっているよ。 行きたい所へとんで行けるよ。	 No. 2	(これなあに) このお家に入ると変身できるよ。 家には、変身する水が入っているよ。2階に上って食べたいものを言うと、出てくるからやってみてね。
 No. 3	(これなあに) タクシーだよ。 (どんな車なの) 車に乗ると、チョコレートやパイナップルが出てくるよ。	 No. 4	(これなあに) 宇宙のお家だよ。 お家の中が宇宙になってて、こわいんだよ。 ロケットにもなるよ。
 No. 5	(これなあに) 宇宙惑星だよ。 きれいな星が見えるよ。 ビルがあって泊まる所もあるよ。 リンゴ組みんなで住んでるんだよ。	 No. 6	(これなあに) やねが開く車だよ。 (他にもあるの) 色がきれいだよ。 動物も近くで見えるよ。
 No. 7	(これなあに) 信号機だよ。 (これ信号機なんだ) ※赤・黄・緑の紙を貼る 壊れても自分の力で直すことができる信号だよ。	 No. 8	(これなあに) 飛行機タワーだよ。 (飛行機なんだ) ※飛行機のはねを折り紙でつける。 飛行機が重なっているんだよ。 みんな一気に出発するんだよ。 海の中も潜れるんだよ。
 No. 9	(これなあに) マンションだよ。 広いお部屋もあるよ。 2階に上がると、きれいなお外が見えるよ。	 No. 10	(これなあに) 船だよ。 溺れそうな人を助けるんだよ。 (へー、助けることができるんだ) 黄色いひもを投げて助けるよ。 筒の中も入れるよ。
 No. 11	(これなあに) 何でもできる車だよ。 飛べるし、海の上も走れるし、海の中も泳げるよ。 坂道も早く走れるよ。	 No. 12	(これなあに) 宇宙マンションだよ。 マンションから出ると、宇宙に行けるよ。 仮面ライダーゴーストに会えるよ。 ※製作中は、廃材をつなげることを楽しみ何をつくっているか意識していなかった。No. 5の隣に掲示し、宇宙マンションと名付ける。

8 高梨・小林：子どもの製作活動と発話に関する研究

	作者コメント		作者コメント
 <p>No. 13</p>	<p>(これなあに) ピタゴラスイッチだよ。 ボールを入れて出てくるとサイコロになるよ。 ※毎日のように傾きを変えて遊んでいた。</p>	 <p>No. 14</p>	<p>(これなあに) 望遠鏡がある船だよ。 2階では、花火が見えるよ。 ライトもつくよ。 レストランもあるよ。 人が泊まる所もあるよ。 ※船の周りも海のイメージで折り紙やスズランテープで飾りつけをした。</p>
 <p>No. 15</p>	<p>(これなあに) 白バイだよ。 悪い人を捕まえるよ。 ぼくが乗ってるよ。</p>	 <p>No. 16</p>	<p>(これなあに) ホテルのビルだよ。 (どんなホテルなの) テレビも机もソファーも全部大きくてピカピカだよ。 ※ホテルの中は、自分の家のことを話す。</p>
 <p>No. 17</p>	<p>(これなあに) ビルだよ。 ビルがいっぱい集まっているよ。 ビルに入ると、楽しい音楽が聞こえてくるよ。</p>	 <p>No. 18</p>	<p>(これなあに) パトカーだよ。 動くと前の部分が黄色く光るよ。 明るくなって見やすいよ。 6人乗りだよ。</p>
 <p>No. 19</p>	<p>(これなあに) ブルドーザーだよ。 道路の石を運んでいるよ。 道路がいっぱいできてくるよ。</p>	 <p>No. 20</p>	<p>(これなあに) ヒラヒラ葉っぱがついているラップだよ。 (どんなラップなの) ラップを鳴らすと、みんなが跳ぶよ。</p>
 <p>No. 21</p>	<p>(これなあに) クリニックだよ。 痛い所に注射をして治してくれるよ。 かわいくなって帰れるよ。 ※親がクリニックを経営 ※夢がプリキュア</p>	 <p>No. 22</p>	<p>(これなあに) ダンスパーティーがあるお家だよ。 2階から花が見えるよ。 妖精さん達が集まってくるよ。</p>
 <p>No. 23</p>	<p>(これなあに) 東京タワーだよ。 中に滑り台や鉄棒があって遊べるよ。 窓から食べ物が出てくるよ。</p>	 <p>No. 24</p>	<p>(これなあに) プールだよ。 じゃぶじゃぶ遊んでいっぱい泳げるよ。</p>

	作者コメント		作者コメント
 No. 25	(これなあに) ケーキ屋さんだよ。 このケーキを食べると羽が生えて飛べるよ。 2階は、花の家だよ。	 No. 26	(これなあに) マンションだよ。 マンションの中は宇宙になっているよ。ふわふわ浮かびながら遊べるよ。
 No. 27	(これなあに) チョコレート屋さんとケーキ屋さんだよ。 ここのお店のもを食べると幸せになれるよ。 妖精も買いにくるよ。	 No. 28	(これなあに) 動物が住んでいるお家だよ。 このお家に入ると魔法が使えるよ。 いっぱい遊べるよ。
 No. 29	(これなあに) ケーキ屋さんだよ。 このケーキを食べると跳べるようになるよ。 うさぎさんとお話もできて、遊べるよ。	 No. 30	(これなあに) 明恵先生のお家だよ。 このお家に入ると、魔法が使えるよ。 いっぱい遊べるよ。
 No. 31	(これなあに) 鐘だよ。 チリンチリンなって、ドレスがたくさん出てくるよ。 魔法も使えるようになるよ。 みんな神様にもなれるよ。	 No. 32	(これなあに) 唐辛子屋さんだよ。 (唐辛子屋さん) いろんな色の唐辛子があるよ。 魚味, チーズ味, ニンジン味, ブロッコリー味があるよ。 ※毎日少しずつ唐辛子が増えていく。
 No. 33	(これなあに) いちごケーキだよ。 (どんないちごケーキなの) ふわふわで甘くて、おいしいよ。 これを食べると、夢がかなうよ。		

※ () 内は保育者の言葉掛け